

(1) 災害が発生する環境

自然現象が自然災害になるには、相手があるわけで、それは人やものが存在することに加えて人の意識の程度にも関係していると思います。つまり、自然災害についてこれまでの経験をベースにして避難や強靱化を図り、自然との共生を意識した行動をすれば被害の最小化は可能なことは明らかなです。しかしながら、これまでは災害があっても復旧や復興を可能にする一方で、いつ来るかわからないようなことを気にするのは杞憂だとばかりに、先ず目先の暮らし優先するということが続けてきたということになります。いまのように生活スタイルが多様化、高度化してくると、国土を強靱化すれば何とかするという錯覚に陥ります。

最近の豪雨や地震や津波といった自然現象は、発生回数も規模も活発期に入ってきているという印象すら受け、さらにこれまでの設計条件を上回る様な状況にさえなっているのではないかと思います。例えば、以前は豪雨になって川が氾濫しても遊水するエリアがあって、冠水被害があっても大きな災害にならずに回復することがありました。しかし、いまでは河川改修で河川が水路化した結果、河川に水が一気に集中することになって、川からの溢水、越流により広い範囲での浸水や氾濫被害が及ぶということになっています。つまり、河川整備ということで河川改修し、その周辺を開発した結果、災害の助長も起きています。

もちろん、科学技術の進展で昔のような対応以上のことが可能になったとはいえ、まだまだ自然の外力には勝てないのです。そこで、災害に耐えるようなものを積み上げていくのか、ある程度抑制できる程度にして残りをほかの手段にしていくのかというところを明確にすることが今後の課題であります。そして、科学技術の発展を待つあるいは期待しつつも、ソフトとしての私たちの暮らし方、土地の利用の仕方を考え直す機会にもなっていると思います。このままのような状況でいけば、コストも機能も維持できない状況になっていくしかありません。安全も安定を目指す方策も選択と集中することをしていかないと、無益なあるいは無為なことを続けていくことにもなるように思えてきます。

そのためには、一人ひとりが国土を十分に理解し、自然現象による負の影響から逃げられる行動を認識する必要があります。自然災害による被害は、私たちの意識次第で最小にすることが出来るし、無駄な出費を出来るだけしないような手立てが構想できるような気がします。